

学年・教科：小1 国語

単元名： すきなものなあに

時	内容	活動	有効であった点	改善を要する点	子どもたちの反応
1	「ぼくは～です。」	親族の呼び名と職業の語彙を使って短文を作る。	親族の呼び名を学ぶ。 職業の名を学ぶ。	職業についてより具体的なイメージを持たせる事ができると良かったと思う。	「ぼくはカメラマンです。」など、将来の自分を描いた文を作れた反面、よくわからない家族に関しては、適当な単語を選んでいった。
2	「～は～です。」 「象は大きいです。」	動物、食べものの語彙を学ぶ。動物リスト、食べ物リスト作成。 簡単な形容詞を学ぶ。 動物、食べ物と形容詞マッチングゲーム。	各自で知っている動物、食べ物を日本語で学ぶ。 形容詞対応する動物、食べ物などを自分で探し出すことができた。	様子を表す形容詞に限定されてしまい、感情を表す形容詞や表現を引き出せればよかった。	動物、食べ物と形容詞マッチングゲームでは、それぞれに素直に形容詞を選んでいった。「大きい」で「ピザ」を選ぶ。「わくわくする」と「しかくい」で「プレゼント」と書いたカードのとりあいになる。
3	「～君は〇〇が好きですか。」 「はい、好きです。」 「いいえ、嫌いです。」	質疑応答。	自分が好きなもの、そうでないもののはっきりわかる、また、条件付きで好きであればそれを表現しようとする。	「はい」と「いいえ」をはっきり言えるようになることが良かった。	「好きです」だけでなく「大好きです」「とっても好きです」という表現が出てきた。
4	「～君はどれが好きですか。」	各自語彙リストを準備し、その中で好きなものを前もって選ぶ。 語彙リストからどれが好きか選んで発表。	ある程度的を絞って語彙を準備したことにより、その範囲での語彙の習得、かつ、関連する言葉等を使っての短文が作れたこと。	実際にはリストにない好きなものがある。その分野へも語彙を増やせる時間が持てれば良かった。	「好きなもの」がリストにない場合は自分で追加し、リストの中にはない「好きなものを」伝えようとしていた。 リストの中から選ばなければならないという条件を理解していないというより、「好きなもの」は自分で決めるという意志の強さを見せていた。
5	「～君は何が好きですか。」	語彙リストに書いてあることに限らずに、好きなものを考える。 自分が好きなものを伝え	自分が好きなものを、他の先生にも伝えることが出来たこと。そして、その先生の好きなものを聞き取ることが出来たという、日本語を使っての会話成立、任務達成	一人の先生としか、会話ができなかった。 連続して何人か別の人と会話できると良かったと思う。	質問に行く前に注意深く質問文を練習し、帰ってきたら聞き取ったことをしっかりと伝えられかつ、日本語が通じていたことがわかった時の達成感が自

		「先生は？」と質問をし答えを聞いてくる。	感が得られたこと。		信につながったようであった、
6	「～君は何が好きですか。」 「なぜ好きですか。」	語彙リストから好きなものを選びなぜ好きなのかを考える。 図を使って語順チェック。 「なぜかという」というつなぎ言葉の導入に挑戦。	みんなに伝えようという発表を目標として好きなものを自分で選び、「なぜ」と言う理由も自分で探し出せた。	もう少し自由に理由をつけられるような指導が出来たらよかったと思う。	毎回の発表で、言いたいことが変わる。 好きなものは変わらないがその日の気分で発表の内容が変わっていた。

伸ばせた力、子どもの変化、保護者の反応など

* 伸ばせた力

日本語での語彙は増えたはずである。また、物の様子等を少しではあるが表現できるようになっている。

評価のルブリックが理想的に使われたとは思えないが、毎回の発表で前回より、よりよく発表できるように各自努力していた。

* 子どもの変化

何をしているのかがわかり始めるにつれ、自然と自主的に日本語で表現しようとする。自発的に話そうとする点においては変化があったと思われる。

* 保護者の反応

毎回の発表のビデオ録画、生徒の自己評価、先生からの評価の報告を受け普段見られないカメラの前の子どもの姿を見ることは、ある意味楽しみだったのではないと思われる。また、次はこの点を伸ばせるといいですね、とつけくわれると、なぜか、家庭での練習が強化されたようで、授業中全く話を聞いていない子が、発表になると正確な文を話していた。

所感

研究授業と言う課題の中で、最終ゴールを決め授業の準備をし実行していく事は、私、初任者にとってある意味、道標となった。

日本語が通じないだけでなく、授業中じっとしていることすらできない子供たちに対して、教科書を使って日本語を教えることは意味がなく、いかに子供たちの興味をひかせ、持続させるかが課題の中、発表と言う場を設けて日本語を話させるという授業は、3か月以上かかってしまったが

思った以上の結果を得たと思う。何よりも子供たちが自分から日本語で話そうとし始めているのを感じ、卵の殻を割ることが出来たのではないかと多少自己満足している。

人前で発表すると言うことが、これほど効果をもたらすとは思っていなかった。運よく、発表したくない、他の子が言ったことをまねしていえばよいなどと言う雰囲気は全くなく自分の番になったら、自分の事を語るという暗黙の了解のようなものが出来ていた事に驚かされた。

発表の場は今後も続けていきたいと思っている。それが彼らの日本語を話す目的になるのだから。

今は他人の発表をあまり聞いていないようだが、そのうち聞くようになり、それに対して意見を出し合い、お互いに日本語でコミュニケーションができるようになれば良いと期待する。